

Nine days in Tibet



河口慧海は”Three years in Tibet”を書き、Heinrich Harrerは”Seven years in Tibet”を書いた。”Nine days in Tibet”の観光旅行では比ぶべくもないが、チベットの一端に触れて感じるところ、考えるところも多かった。



2009年4月30日 バスにて西寧(標高2,275m)からゴルムド(2,828m)まで。
朝7時、雨の西寧を出発し、途中通行止めのために迂回したため走行距離900キロを超えて到着したのは深夜2時前。



西寧より約100km、青海湖の東部にある日月山口の峠(3,520m)に着くと身を切るような吹雪。7世紀に政略結婚で唐からチベットの吐蕃王国に嫁いだ文成公主が、この峠で唐を振り返って別れを告げたと言う。
嘗てのチベットは唐をも攻め入る力を持っていたが、1950年の中国人民解放軍のチベット侵攻に対しては古い兵器しか持たない1万の兵力ではなす術もなく征服された。







青海湖 海拔3,260m
琵琶湖の6倍の広さと言う。中国最大の塩湖。名前の通りの淡いエメラルドブルーの色合いが美しい。





茶力湖
中国最大の塩産地。今後数百年分の塩が取れるという。





5月1日。ゴルムドーラサ。西藏鉄道で15時間の旅。西藏鉄道は、2006年に青海省の西寧と西藏自治区のラサを結ぶ1956kmの区間が開通した。



世界一高い地域を走る西藏鉄道。唐古拉駅は標高5,067m

ダライ・ラマは、「チベットには鉄道は要らない」と主張していたが、さらにラサからシガチェまで延長の計画がある。我々観光客には便利だが、レアメタルなど豊富な鉱物資源の開発が主目的のようで、チベットの人々にとって本当に有用なものかどうか。





トト河は揚子江の源流





ポタラ宮。 宮殿の周囲を右回りに、巡礼者が手にしたマニ車を回しながら歩く。農作の季節のため巡礼者は少ないというが、途切れることはない。ポタラ宮の主のダライ・ラマ14世は帰還を希望しているが叶えられそうにない。ダライ・ラマ14世は、「自分の生まれ変わりは中国では生まれない」と予言している。



ポタラ宮正面の広場には、五星紅旗が空高く翻っている。この広場で記念撮影のため地面に座ったらすぐに警察官が来て、一時的でも座るのも物を置くのも禁止だと言う。1年前の騒乱が思い起こされる。許されているのは、五体投地による祈りだけだ。



ラサは海拔3600メートルにあり、ポタラ宮は麓から最上階まで170メートルある。富士山登頂の最後の部分と同じ標高となる。階段は一步ずつゆっくり昇らないとすぐに息が切れる。一旦息が切れると、なかなか回復しない。





ジョカン寺(大招寺)から見るポタラ宮。ジョカン寺はチベット仏教の中心的な役割を果たしている。文成公主が唐より持ってきた釈迦如来像を安置する寺として建立されたと言う。ジョカン寺はの周りにはバルコル(八角街)と呼ばれる門前街があり、土産物屋が並ぶ道を巡礼者が右回りに巡っている。中には縁者の生まれ変わりの山羊と巡礼している人もいる。





セラ寺 ラサ北部の山の麓にある河口慧海や多田等観がチベット仏教を学んだ寺。

河口慧海は、チベットを離れる直前に修行仲間に告白するまで日本人であることを隠して修行していたと言うが、現在でも高僧として尊敬されている。

セラ寺の背後の山には鳥葬場がある。チベットの仏教徒は鳥葬に付されるが、その体は骨も切り刻まれてハゲワシに捧げられ、15分後には跡形もなくなると言う。すでに転生した後の体は、自然に対する最後の施しだと言う。釈迦の前世である王子が飢えにやつれた虎の母子にその身を投げて捧げたと言う捨身飼虎の逸話に通じるものがある。



ツァンクン尼寺

チベットの寺では、通常本堂の内部では写真撮影が禁止されているが、ここでは収入優先か観光客に撮影を認めている。休憩所ではバター茶を客に売り、作業房ではマニ車などに入れる経文を加工するなど寺院経営は厳しそうだ。若い尼も多いが、屈託がなく明るいのが良い。



5月3日 ラサからシガチェまで。カンパ・ラ峠(4,749m)では突然の竜巻発生に驚く。



カンパ・ラ峠からのヤムドゥク湖の眺望



五体投地でアムドからラサを経て聖地カイラスに向かう一家。アムドを出てから、既に2年3ヶ月経ち、カイラスには2年後に到着予定と言う。総距離4000キロを超える巡礼だ。雨、風、雪、どんな天気でも一歩ずつ進む。一日にすると3キロ程度の進み具合だ。夫婦と長男が五体投地をし、次男がロバが引くりヤカーを操り、小さな三男と犬二匹が家財道具の上で寝入っていた。五体投地をする三人の額は、地面に擦り付けるため中央が盛り上がって白毫のようにも見える。家財道具の中に、太陽電池があるのが現代的だ。





ギャンツェの古城



馬車やトラクターが地元では重要な交通手段となっているようだ。バイクにリヤカーを引かせるのもある。



シガチェ、タシルンポ寺。阿弥陀如来の転生と言われるパンチェン・ラマの寺院。パンチェン・ラマ10世は、ダライ・ラマ14世が亡命した時チベットに残ったが、文革当時9年間も投獄された。1989年に中国政府に批判的な演説をした5日後に心臓発作で入寂したため暗殺が疑われている。10世の転生者の認定を、ダライ・ラマ亡命政府と中国政府の双方が行った。ダライ・ラマ側が認定した11世が行方不明となり、中国政府の関与が認められている。現在は中国政府が認定した11世が座主となっており、2008年の騒乱でもここでは平静が保たれた。



寺院正面に目に付くのは「札寺民主管理委员会」の建物。中国政府の管理下にあることを如実に示している。そのため「紅い寺」とも呼ばれている。10世の亡き骸はストウーパの一つに納められている。



標高4,200m程度が農耕の限界となる。これ以上は、遊牧のみが可能となる。農耕にはヤクや牛が使われている。穀物では裸麦が主体で、チベット人の主食ツァンパとなる。ツァンパは焙煎した裸麦を粉にしたもので、寺院のお供えをそのまま口にしてみたが旨いとは言えない。

ヤクの糞は乾燥させて壁や屋根に積まれている。これが燃料として使われる。







シシヤパンマ 8,027m (トン・ラ峠 5,050mより)



トン・ラ峠 5,050mからの眺望



マカルー 8,463m

ローツェ 8,516m エベレスト 8,848m

2009年5月6日 8:33



パン・ラ峠5,100mからの眺望

チョー・オユー 8,201m



2009年5月6日 8:30 パン・ラ峠よりエベレストとローツェ



2009年5月6日 8:30 パン・ラ峠よりチョー・オユー



エベレストベースキャンプより 2009年5月6日 11:40



ロンボクより 2009年5月6日 21:40



5月にエベレスト登山が集中している。世界中から多くの登山隊がキャンプを張っており、日本からも神奈川大学と個人登山家の2隊が登頂を控えていた。昨日までは天気が悪くてエベレストが1週間も顔を出さなかったらしく、われわれは運が良い。6月になれば雨季に入り、また雲に隠れてしまう。

荷揚げにはヤクが活躍している。シェルパ10人力くらいだろうか、結構な速さで登っていく。







チベットの子供たちは殆どの子が写真に応じてくれる。恥ずかしがる子、ポーズを取る子、いろいろだがみんな素朴で屈託がない。鼻水を垂らしたのが乾いたままの子供が多い。昔は日本の子供もこんなだったな。

















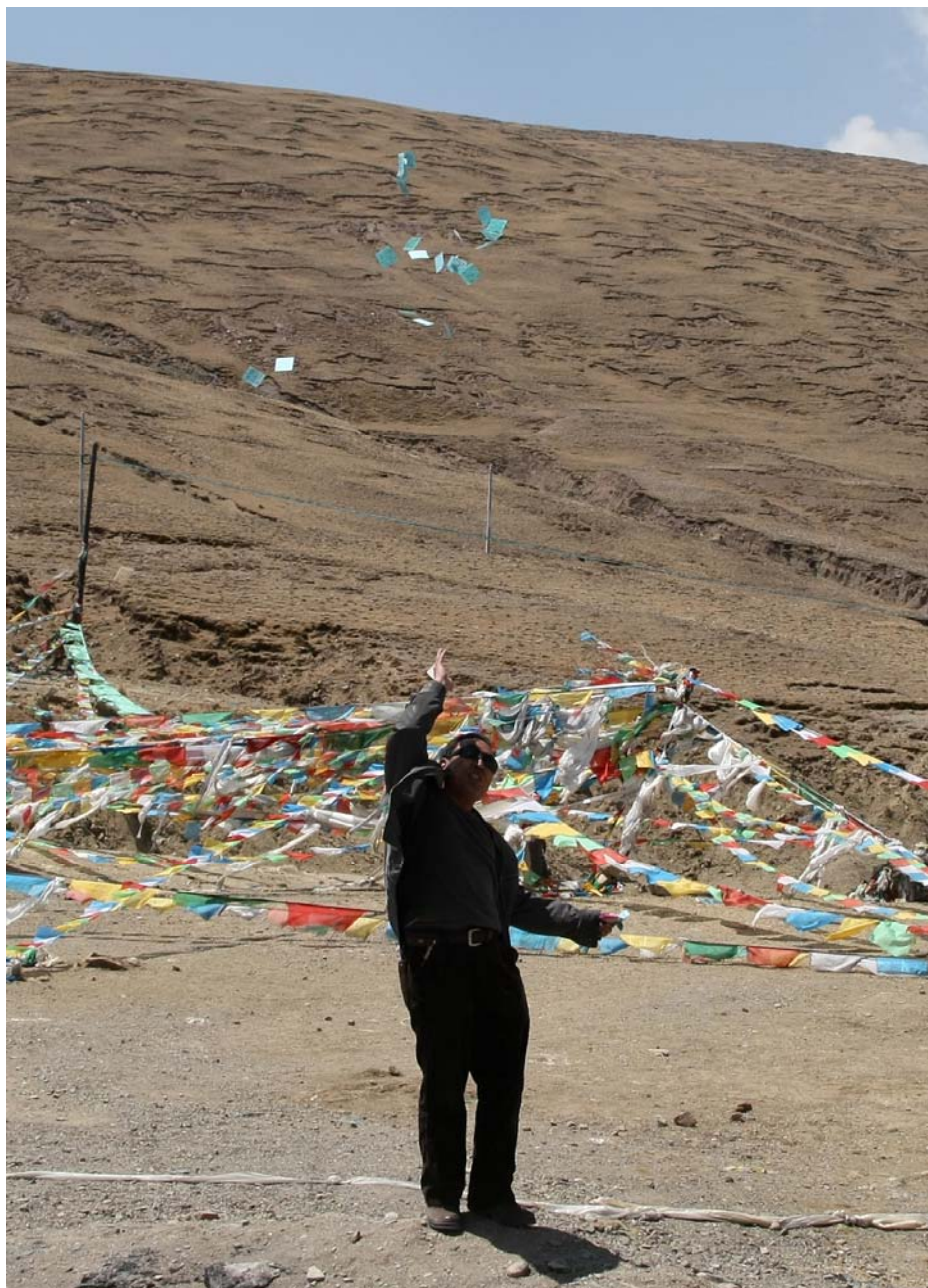












チベット人ガイドのドルジェ氏

ドルジェ氏の波乱に満ちた人生もひとつの物語になりそうだ。大学で医学を学んだものの向いていないと公安に入った。その公安に派遣されて日本で3年間の語学留学。チベットに戻ったが、エリートコースを捨てて、インドのダライ・ラマのもとに1ヶ月を掛けて夜道だけを歩いて密出国した。インドでは3年間の仏教修行して、再び密入国でチベットに戻って通訳・ガイドになる。

仏教に対する深い造詣とともに、中国の侵略に対するチベット人としての誇りに感銘を受けた。彼のような高い志を持ったチベット人がいればいつの日か自分たちの国を取り戻せるものと信じている。

今回の旅行はエベレストなどヒマラヤの山々を見るのが目的であったが、天気にも恵まれて素晴らしい眺望を堪能できた。

チベットの人々との直接の交流はなかったが、仏教に対する信仰心の高さには驚く。貧しそうな人々が寺院に来て施しをする姿が美しい。物質的な生活と精神的な生活の比率がわれわれとは異なるのであろう。

五体投地で巡礼する家族の真似はできないが、四国に遍路の旅に出てみたくなった。

2009/4/29 - 5/10

英 隆行

hana52@osaka.email.ne.jp